

祝 辞

埼玉県警察学校の合同入校式が執り行われるにあたり、県議会を代表いたしまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

晴れて今日の佳き日を迎えられた皆さん、御入学、誠におめでとうございます。また、今日まで、皆さんを温かく見守り、成長を支えてこられた御家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

我が県の治安情勢は、ここにおられる鈴木三男 本部長をはじめ、皆さんの先輩方の御活躍により、着実に回復しています。昨年の刑法犯認知件数は、平成17年以降13年連続で減少しました。また、殺人等の重要犯罪の検挙率は、19年ぶりに80%を上回りました。これらの成果は、埼玉県警察の皆様の不断の努力の賜であり、私も一県民^{いち}として、誠に心強く感じております。

さて、住民にとって、警察官とはどんな存在でしょうか。作文コンクール「わたしたちのまちのおまわりさん」において、平成22年に内閣総理大臣賞を受賞した小学四年生の作品を、少々長くなりますが、ここで紹介させていただきます。

「私のお父さんは警察官です。いつも明るくて、みんなを笑わせる、子供に優しい人です。優しいだけではなく、時には厳しいときもあります。そんなお父さんは毎日仕事で忙しく、とても大変です。家にいても呼び出しがかかれば、すぐに出て行きます。私が初めてテニスの試合で入賞し、表彰式の写真を撮ってもらおうとしたとき

も、呼出しがあり、せつかくの表彰式を見ないまま警察署に行きました。初めての表彰式は、何だか嫌な一日になってしまいました。行方不明になった人を探すために呼び出されたそうで、仕事から帰ってきたお父さんに、『何で仕事に行ったん？』と聞くと、『助けを待っとる人がおるやろ。その人たちにも大事な家族がおるやろ』とだけ言いました。私は、その言葉から温かい気持ちを感じました。おっちょこちょいで、恥ずかしいぐらい大声で話すお父さんからは想像できませんでしたが、なぜお父さんが警察官になったのか、ちょっとだけ分かったような気がしました。

私のお父さんはよく泣きます。この前も大阪で子供二人が御飯も食べさせてもらえず、暑い中で寄り添って死んでいたのが発見される事件があり、その新聞を読んでいたお父さんが泣いていました。『暑かったやろな。助けてあげられんかったんかな。何のためにこの世に生まれてきたんやろ』と言って泣いていたのを見つけました。私と目が合ったお父さんは、恥ずかしそうに『年取ったら涙もろくなっていかんわ』と慌てて涙を拭きました。でも、私は知っています。お父さんが泣くのは年を取っているからではありません。事件を憎んで、何かできなかつたか、助けてあげたかつたと自分を責めて、悔しくて泣いているのです。

私から見て、警察官という仕事は格好いいものではありません。実際に私たち家族も、これまで何回予定が狂ったか分かりません。そのたびにお父さんとお母さんはけんかをし、私たち三人の子供も嫌な気分になりました。でも、お父さんのように、事件や事故を見て、他人のために泣いている警察官がいるということ、私たちが安

心して生活できるのは、全国にいるお父さんのような泣き虫の警察官が守ってくれているんだと思います。

『人のために何かをする』そんな心をお父さんは私に教えてくれました。私はそんなお父さんに感謝して、大きくなって家族ができたら教えてあげたいです。『ありがとう、と言ってもらえるような人になりなさい』と」。

警察官の皆さん、毎日毎日皆さんの姿を、格好いい、親切、優しい、勇敢、こんな思いを持って頼りにし、感謝している人が大勢いるのです。こうした人たちの期待に応えられる警察官になってください。

県議会といたしましても、県内治安の更なる改善のため、警察官を増員し人的基盤を一層強化するよう、国に要望しております。今後とも、県民誰もが安心して、心豊かに暮らすことのできる社会の実現に向け、全力を尽くしてまいります。

結びに、入校された皆さんの輝かしい前途を重ねてお祝い申し上げますとともに、御参会の皆様の御健勝、御多幸を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

平成30年4月6日

埼玉県議会議長 齊藤正明